

# 元禄地震・津波 (1703-XII-31) の下田 以西の史料状況

国立防災科学技術センター 都 司 嘉 宣

(昭和 56 年 5 月 15 日受理)

## Documents of the 1703 Genroku Tsunami along the Coasts of the Tokai District, the Kii Peninsula, and the Shikoku Island

Yoshinobu TSUJI

National Research Center for Disaster Prevention

(Received May 15, 1981)

In the early morning of Dec. 31, 1703 (Genroku 16), an enormous earthquake with magnitude of 8.2 occurred in the south sea region of the Kanto District. It is well known that after the occurrence of the earthquake a huge tsunami was generated, and that the coasts of the Boso Peninsula, the north coasts of Sagami Bay, and the east coasts of the Izu Peninsula were seriously damaged.

Recently several old documents of the Genroku tsunami were also discovered on the coasts of the Tokai district, the Kii peninsula, and the Shikoku Island. In two towns, Nishina and Toi, on the west coast of the Izu Peninsula, inundation height was estimated 3 meters, and the residential areas of these towns were slightly submerged. At Miho village in Shimizu city on the west coast of Suruga Bay, residential areas were intermittently submerged for more than ten days, and the people took refuge in higher places. On the mouth district of the Lake Hamana, seaside banks were eroded, and the mouth of the lake became broader. Thirty-three large junks out of 36 anchored at the open sea of Arai town near the lake, were wrecked. In Ono town on the Chita Peninsula inside the Bay of Ise, a garden of Naiku shrine was washed and eroded, where inundation height was about 2 meters. Tsunami was also noticed at the port of Nagoya. Miwasaki and Taiji towns and Haida village on the south east coast of the Kii peninsula were seriously damaged in spite of the long distance from the tsunami origin. In these places 46 houses were washed away in total and the observed tsunami climbed up to 3 or 5 meters. Tidal irregularity was also noticed in several ports of Kochi Prefecture on the Shikoku Island.

### §1. はじめに

元禄十六年十一月二十三日未明, (1703 年 12 月 31 日 午前 2 時ごろ), 関東地方南岸沖を中心としておきた「元禄地震」( $M=8.2$ ) に伴う津波は, 房総半島沿岸と, 鎌倉付近, および伊豆半島東岸, 下田までの沿岸各地に大きな被害を出したことは, よく知られている. 武者 (1941)

---

昭和 55 年 10 月 14 日発表

の編した「増訂・大日本地震史料，第二巻」（以下、「史料」と書く）には，41 ページにわたって，この地震・津波に関する文献が載っているが，近年さらに羽鳥・他，(1973)，羽鳥(1975) a, b, c, 1976, 1979) などにより，房総と伊豆東岸の各地で記録の発掘がなされてきた．その結果九十九里海岸で 5~6 m，房総半島の先端付近で 8~10 m，江ノ島で 8 m，伊豆伊東付近で 8~10 m，下田で 3 m という，津波水位の分布が知られるようになった．これに対して，下田以西については，これまでほとんど津波記録が知られていなかった．「史料」にも下田から余り離れていない南伊豆の二つの史料と，「渥美郡史」の史料，および尾鷲市九鬼浦に関する「地震洪浪の記」の，合計十行ほどの文章しか載っていない．これまでの研究でもこのわずかな記事は無視されるか，参考程度にふれられるにすぎなかった．「渥美郡史」は大正になってから成立した文献であり，本当に渥美郡の現地の状況をのべているかが疑われたのであろう．また九鬼浦の史料は，その原文の語り手「九鬼右京の粹」なる人物が，元祿津波がおきてから 150 年も後（嘉永七年正月），旅先でふと話したことを筆写したというもので，やや信頼性に欠けると考えられる．その上元祿津波の四年後には宝永津波がこの地方をおそっており，それとの混同の疑いが濃いと考えられても無理のないことであつた．そしてなにより，研究者にこれらの文献が軽視された最大の理由は，この二つがいずれも近接地域に，傍証しあう他の史料のない，孤立した史料であつたからであろう．

これに対して近年筆者は，伊豆西岸の土肥，清水市三保，浜名湖口地方，知多半島，名古屋市熱田，海山町，尾鷲市，新宮市，太地町，そしてはるか四国にまで，元祿津波が及んでいた

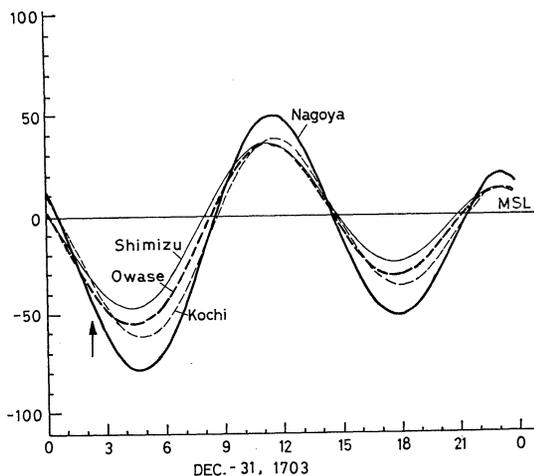


Fig. 1. Calculated astronomical tide component (cm) on Dec. 31 th, 1703 for Shimizu, Nagoya, Owase, and Kochi. An arrow shows the estimated occurrence time of the Genroku earthquake.

ことを示すいくつかの史料を発掘した．これによつて，元祿地震は，紀伊半島でも少なくとも四十六戸の家が流失する被害を出し，四国で人々の注意を引くほどの津波を起こしていたことが明らかとなつた．以下順に各地の史料状況を見てゆくことにしよう．なお，地震発生時刻は「二十二日丑刻」，「二十三日暁」としたものが多く，真夜に日付の変わる現代の時制で言えば，二十三日の午前 2 時ごろ起きたと思われ，津波の初期波は，その 1 後時間以内に四国にまで伝わっているはずである．人

に最も気づかれにくい時刻におきているので被害を伴わない小津波がおそつた海岸などではほとんど気づかれなかつたであろうことに注意する。

この日の天文潮汐を計算してみると、東海、紀伊、土佐の各沿岸とも、午前 4~5 時ごろ干潮で、平均海面より 50~80 cm ほど低く、各地へ津波初期波が到達した 2~3 時は、平均海面より 40~50 cm 低い潮位であつた。満潮は各沿岸とも 11 時ごろで、平均海面より 60~70 cm 高くなつている。幸いなことに津波は天文潮の低いとき起きたのである。

以下の考察で、被害記事などから津波水位を推定するとき、しばしば昭和 35 年のチリ津波の記録と対比した。チリ津波は、東海、紀伊、四国沿岸各地で 1~3 m の波高を示し、元祿津波の波高とやや似た水位であるからである。チリ津波では、津波第一波到着時刻が天文潮位の満潮時刻と一致しており、各地で津波本来の潮位より 80 cm~1 m 高い到達水位を示した。また羽鳥 (1977, 1978) も大いに参考とした。

なお、本稿で引用する新たに発掘された史料の詳細は別途発表する予定である。

## § 2. 伊豆半島南岸・西岸の史料状況

手石・小稲「史料」の 73 ページ所載の「山田健治所蔵文書」には、伊豆竹麻村港で、田畑が浸水したと記してある。羽鳥・他 (1973) によると、これは手石・湊付近で 3 m の津波波高があつたとされている。

仁科「史料」の 72 ページには、西伊豆町仁科の「佐波神社享保二年丁酉歳建立棟札」の

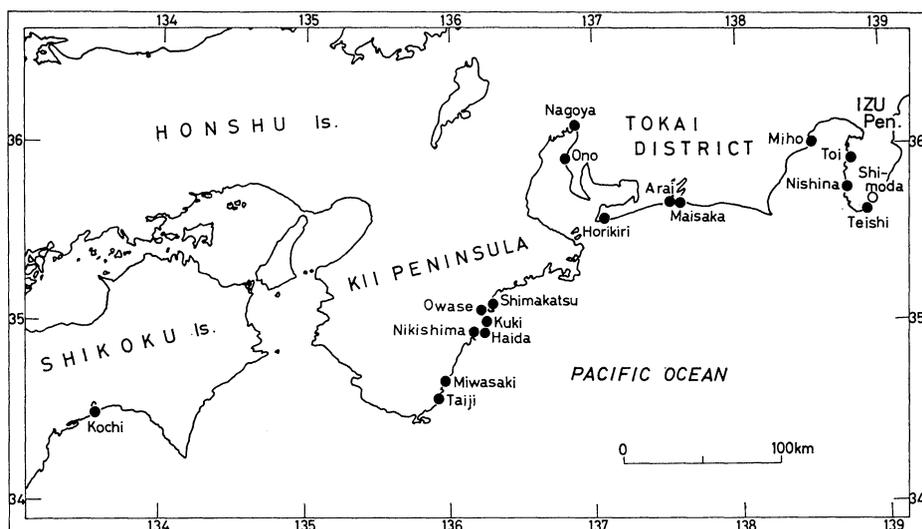


Fig. 2. Places where the Genroku tsunami is recorded in old documents.

文が載せられていて、「享保二年より十四年先申之年霜月廿三日明ヶ夜に大地震ゆり、津浪上り申候。伊豆下田は大乱に御座候」とある。棟札というのは、神社の修改築のさい支柱に貼付けられる木板で、普通、資金を寄進した人、発起人、大工名、修改築年月日、および修改築に至った理由などが書かれる。上の棟札の現物が不明なので、上の文が原棟札のどのような文脈に出現しているのかはわからないが、「仁科の村落の永遠の平安を祈る」目的で建てられた神社の棟札の文に出現する以上、修改築以前に仁科がこうむってきた災害を列挙する文として記されたことは確実である。仁科も多少浸水したのであろう。ただし、「大被害が出たのは下田だ」と云っているのであるから、この神社のある仁科や、すぐ南の松崎には重大な被害は出なかつたのである。以上の考察から仁科は沿岸の家屋に浸水があつた程度、家屋の倒壊、流失までは生じていないと推定される。佐波神社の標高は 3.5 m であるので津波波高は 4 m 位か。

**土肥** 京都賀茂神社の神宮によつて記された「梨本祐之手記」という文献が、熊原政男の校訂を受けて「神奈川県文化財報告、19」に載せられている。この文献の筆者は、江戸から京都へ戻る途中、戸塚に宿泊中、元祿地震に遇つている。彼が地震直後通つた神奈川県湘南地方のありさまを、非常に詳しく記している。相模川馬入の渡りで渡船が流失したこと、大磯に津波がおそい三百石船と五百石船が流失したこと、大磯の地盤が隆起して海岸線が二町（約 200 m）退いたことなど、この文献によつて初めて知られる事柄である。その筆者が地震の五日後、三島宿で次のような話を耳にしている。

三島駅の人語けるは、土肥、伊藤、うさみ、あたまは廿二日の夜、津波にて人家多没したり。あたまと云所は人家五百軒斗所有也、わつかに拾軒斗残りたるとそ。

伊東を「伊藤」と書き、熱海、宇佐美をカナ書きし、しかも「あたまと云所」と「云」の字が入っているのは、この筆者にとつて、これらの地名が耳からはじめて聞いたもので、正しい漢字表記を知らなかつたことを示している。まして土肥という地名は筆者には初耳であつたはずである。このことは上の文の「土肥」がこの文の筆者のあいまいな連想からまぎれ込んだのではなく、三島の風聞に最初からあつたことを示している。上の文を卒直に解すれば土肥も津波被害が出たことになる。次に述べるように、内浦の史料に土肥のことが特に出てこないのに、土肥の数十パーセントの家が流失した、というような重大災害があつたと考えることはできない。土肥の集落はやや広い砂浜の背後にあるため、下田より集落のある場所の標高が高く、津波水位が同じでも被害は少なかつたと考えられる。潮汐成分を考慮して正味の津波水位は 3 m 程度であらう。

**内浦** 「史料」の 73 ページに内浦の三津の「大川文作所蔵記録」が載せられている。これには宇佐美、伊東など伊豆東岸の津波被害が多く記してあるが、内浦現地の状況については全

く記されていない。もし被害が出たのならこの文書に記されないはずはないと考えられ、この文書によって逆に内浦は無被害であつたことが証明されるのである。また土肥、戸田など内浦に近い村港に重大被害がなかつたこともほぼ推定されるのである。内浦大川家の文書は「豆州内浦漁民史料」として渋沢 (1938) の手により刊行されている。元祿十六年前後の文書も何点か載っているが、これにもやはり元祿津波に言及するものがない。内浦は 1m かこれ以下と推定される。

### § 3. 駿河湾・遠州灘の史料状況

三保 「三保村誌」に「元祿十六年、未ノ十二月 (ママ) 二十二日夜ハツ頃ヨリ申ノ正月マテ、家ノ前へ浪入ル、人々御宮へ逃ル」とある。ここには地震や津波という文字はないが、日付、時刻が元祿地震の発生時刻と一致しており、明白に元祿津波の初期波を観測している。水位異常が続いた期間は、十一月二十二日から正月までなら約四十日ということになるが、原文通りに「十二月二十二日から正月まで」と記された表現に含まれる「潮位異常は約十日間弱」という情報を重視すると約十日ということになる。史料的にはいずれが妥当か判定できない。海洋学的には後者の解釈の方が合理的である。干潮時に市街に浸水し、住民が避難した状況から推定すると津波水位は 2m 程度であろう。

浜名湖口地方 「舞坂町誌」に次の文がある。「元祿年中地震津浪ニテ海上荒レテ風強キ時ハ浪高ク、渡舟ノ災多ク……」。この文は少々舌足らずの文章であるが、新居関所史料館所蔵の変遷図などを参考にすると、「元祿津波までは、浜名湖の湖口がせまく、湖内の東海道今切の渡しの航路にまで外洋の波が侵入してくることはなく、安全であつたが、津波のため湖口付近が浸食をうけ、湖口が広がってそれ以後外洋の高波が湖内に浸入するようになり、このため、強風の時は今切の渡船にも支障をきたすようになつた。」という意味であろう。舞坂も対岸の新居も集落は湖内に面しており、このため家屋には被害を生じなかつたようである。

浜名湖口の西側、新居の外洋には大型の運搬船三十六艘が停泊していたが、そのうち二十一、二艘が津波に破損し、積み荷が失なわれた。前述「梨本祐之手記」には十二月二日の条に「浜松の駅に泊る。駅の人語けるは、此城主米穀を積て、江戸へまはず船十二艘、廿二日の夜、荒井の沖にて破損したり。たまたま損せざる船二、三艘有れとも、潮にひたして用にたちかたし。米一万石余失墜したりとそ。又荒井の沖に、江戸大まわしの舟廿四艘有。是も二艘残て、其余は損したりとそ」とある。十二艘で一万石余の米を失つたというのであるから、一艘当り千石 (180 m<sup>3</sup>) 積みの大型木造船であり、それが 80% 程度大破したというのである。明治、昭和の三陸津波の経験では、津波波高が 2m をこえると木造船の破損が出はじめ、4m をこえ

ると大半の船舶に被害を生じている。時代の差による船の強度の差、泊地施設の差を考慮しても津波波高は少なくとも 3m 程度あつたと推定される。

渥美半島「史料」の 670 ページには「渥美郡史」の次の文が載せられている。

二十二日、夜八ツ時地震、経月不止、海水漲溢、人多く死し、漁網、漁具流失す

(細谷村記録、常光寺年代記)

細谷村というのは現在豊橋市域で、静岡県境に近い太平洋岸にある小さな集落である。常光寺は渥美半島先端近い太平洋岸、渥美町堀切にある。この両者は約 40 km へだたっている。上の記事では津波の被害がどちらのことかわからない。それで上の記事のもとになった文献のコピーを豊橋市民文化会館の富安健次氏から送っていただいた。まず「細谷村記録」の原文には「一、同年十一月廿二日(中略)夜、八ツ時江戸大地震、津波」とあるのみであつた。すなわち江戸からの伝聞が記してあるのみで細谷のことは何も記してない。原文には細谷の日常の雑事を数多く記してあるので、細谷で津波による変事があれば記されないはずはないと考えられ、この史料状況は細谷の無被害を逆に証言しているといえることができる。つぎに「常光寺年代記」の原文、

同十一月廿二日夜ノ八ツ時ニ大地震、江戸川崎より箱根迄ノ家ノ損シ人馬死シテ数シレズ。亦此時四海大塩陸ニ上リ、当境ノ漁舟多ク流ル。小田原城郭右地震最中ニ城中ヨリ出火。

富安氏のお手紙では、ここに出現する「当境」というのが、その前文にいう「江戸川崎から箱根」までのことをいつているのか、この文章の書かれた渥美町堀切周辺のことをいつているのか不明であるとしておられる。この点をはつきりさせるために「常光寺年代記」全体について「当」の字の全用例を検査してみた。「年代記」には「当寺」、「当村」、「当郡」、「当郷」という風に「当」の字はきわめて多く使われている。その結果「当」の字はすべてこの「年代記」の書かれた常光寺、堀切、渥美郡を指していて、例外がないことが判明した。また渥美半島以外の別の地方のことを述べている時、その場所をさすときには必ず「此村」、「此郡」、「此郷」と「此」の字が使われている。このような「年代記」に一貫した表記のルールがある以上、上の文の「当境」もまた渥美半島をさすものと解すべきである。この点をさらに確認するために上の文をもう一度読んでみよう。「関東では人がたおれ人や馬が多く死んだ」と記した上で「その同じ関東で漁舟が流失した」という「ささやかな」被害をわざわざ追加記述するだろうか。それよりも「関東は重大な被害が出た。渥美も漁船流失という小被害をこうむつたのだ」というように解する方が文勢として自然であることは言うまでもない。以上の考察により、夜砂浜に引き上げてあつた漁船が流失したのは渥美半島においてである、ということが結論される。漁船は満潮の多少の風波のある時でも波が及ばぬ高さまで引き上げられる。その高さは低く見

つもつても平均潮位面上 1.5 m ぐらいであろう。伊勢神宮で書き継がれた「外宮子良館日記」によると、「廿二日、晴、廿三日、晴、暁地震」となっており、津波の発生した二十三日早朝、風波が高かつたとは考えられない。津波は平均水位より 0.4 m ほど低潮時におきている。従つて渥美半島堀切での津波波高は約 2 m と推定される。なお「年代記」には「漁船流失」とは記してあるが「漁網漁具流失」とは記してない。しかるに「渥美郡史」に「漁網漁具等流失」とあるのは不審である。用語に細心の注意を払わなかつた「郡史」の編者による曲筆であろう。

#### § 4. 伊勢湾の史料状況

**常滑市大野** 知多半島常滑市大野町の小倉神社内宮社の社伝が、愛知県文化会館図書室所蔵の「愛知県・神社に関する調査・知多郡篇」に載っていた。

元祿十六年、大地震、高濤境内を浸シ社殿を東方に移スコト百八十間 (336 m)

この伝承は「大野町史」にもあり、「小田井記」によるとされている。常滑市民俗資料館の盛田美典氏のご教示によると、内宮社は前山川口の南 300 m ほどの沿岸にあり、この付近の地盤は 1 m ぐらいであろうという。この神社の境内中央まで浸水し、かつ津波がここでは 0.7 m ほど低いとき起ているのでやはり津波水位は約 2 m であると推定される。

**名古屋** 名古屋では朝日定右衛門重章の手によつて「鸚鵡籠中記」という日記が克明に書き続けられていた。関東地方の消息もきわめて詳しく記されているが、名古屋でもこの筆者の家の庭の池の氷がわれ水が「逆揚り」、甚目寺の仁王が倒れ足損じたと記してある。津波については「尾州熱田海のごときも一日に三度潮満」と記してある。被害は記されていないのでなかつたものと判定される。津波水位は 1 m 程度であろう。上の記事が津波の初期波であるかどうかはわからない。

#### § 5. 紀伊半島の史料状況

**海山町勝浦** 三重県海山 (みやま) 町の島勝浦に元祿津波がおそつたと、脇貞憲氏の著書「ふるさとの民話と資料」[脇貞 (1977)] の中に述べられている。

元祿十六年 (一七〇三) 夜丑刻 (二時頃) に津波がおそつた。潮はさし引きが十四五度もあり、寺の門口より四間程前へ上つた。家には別条なかつた。

月日の記載を欠いているが年と時刻が合っており、まちがいなく元祿津波の記事である。この文にいう寺とは今も島勝に現存する安楽寺のことである。脇氏によると上の文は「島勝沿革史」にこの通り載っており、そのもとになつた文書は宝永津波のとき失われたのであろうと推定し

ておられる。上の文によると島勝は居住区に浸水、家屋は床下浸水程度とみられる。チリ津波のときに島勝は浸水家屋のほか半壊家屋を出しており、東京湾平均域準面上の 3.5 m 水位（正味の津波波高は天文潮位 0.8 m を引いて 2.7 m とされている）であつた。元祿津波では家は無事であつたのであるからこれより低く、到達水位は 2.5 m 程度、潮汐補正を加えて正味の津波水位は 3 m ぐらいであろう。

**尾鷲市** 尾鷲市郷土館の伊藤良氏から貴重なご教示を得た。まず尾鷲市街については、「見聞闕疑集」（尾鷲組大庄屋文書の末尾）に、宝永津波の状況をのべたあと、次の文面が現われる。

延宝・元祿の頃も津波入り候得共、少々之儀ニ有之候。慶長九年にも津波入候よしに候得共、人家を流し候程の事無之由、申伝へ候。

同様の記載が同市念仏寺所蔵の小河嘉兵衛宣忠筆「宝津浪記」の末尾にもある。

慶長・延宝・元祿の頃も地震高浪有といへとも人家を流したる程の事も無之。

これらが慶長九年津波の数少ない記録の一つであることも注目に値するが、元祿津波もまた尾鷲に及んでおり、「さしたる程の事なし」とある。これを尾鷲市街の海岸近くの一部が床下浸水する程度と解すると、尾鷲の水位は 2 m となるであろう。

**九鬼浦** 「史料」の 68 ページには「地震洪浪の記」が載っており、それによると、九鬼浦の医家九鬼右京の息子尊之助が嘉永七年一月八日に語つた話に、「元祿十六年十一月廿三日巳の刻津浪にて（中略）拙宅下のだんより三だん目迄浪溢れ入る」という。伊藤氏によると九鬼右京は九鬼の宗家で、元祿のころの当主（豊隆）はすでに十三代を数えており、その住居は現在の九鬼小学校の下あたり、石段のあたりは海拔三メートルほどということである。この伊藤良氏のご教示によつて、九鬼右京は由緒古い九鬼第一の名家であること、それゆえその伝承は信びよう性がきわめて高いことが知られる。上の記録の「巳の刻」というのは午前 10 時である。地震発生後約 8 時間を経過している。この日の尾鷲の満潮時刻は 11 時 23 分でその値は平均海面上 37 cm であるが、九鬼浦の最高水位は津波の初期波で観測されたのではなく、満潮時刻近くに観測されたのである。なおこの九鬼家の第二分家宮崎氏は九鬼家の文書を紹介しており、「元祿十六年霜月廿三日丑刻津波押寄せ、助三郎家の前まで上り」とあり、これによれば九鬼浦も初期波で最高水位を観測した場所もあつたことになる。その水位はやはり約 3 m となる。

**早田・二木島** 上述宮崎氏の文にはさらに上の文に続いて「早田（はいだ）では十六軒流失、二木島（にきしま）では逢川橋が流失した」とある。早田は平地が少く現在も海面に近い所から階段状に集落ができており、十六戸流失は水位、5 m ぐらいに相応するであろう。二木島の

水位は 3 m ぐらいと推定される。

**三輪崎・太地** 新宮市三輪崎と太地(たいじ)の元禄津波による被害記事が「岡氏本・熊野年代記」にのっている。岡氏は三輪崎の方であるが、同氏所蔵の「熊野年代記」は、熊野速玉神社に伝えられた、(正本)「熊野年代記」とは異なる独自の記事を多く含んでいる作者不明の文献である。浜畑栄造氏によつて「逸文・熊野年代記」と題する活字本に刊行されている。その文面は次の通りである。

宝永元年、去年十一月地震、津浪、太地三輪崎の家三十軒流る。

太地、三輪崎とも全戸の 1~2 割の家屋が流失したようである。三輪崎は伊豆の下田のような湾ではなく三方浜にかこまれた文字通り岬状の突き出た海岸の上にある。集落の高さも伊豆下田などより高く約 5 m かそれ以上のところにある。このため宝永、安政の両津波にも被害は出なかつた。したがつて三輪崎で家屋流失があつたということは津波は 5~6 m にも達したことになるのである。太地は伊豆下田を半分にしたような山にかこまれた港町である。津波波高は 3 m ほどであろう。

なお上の文面に相当する文は、「正本、熊野年代記」には「宝永元年、津浪あり、三輪崎、太地家三十軒流る」とあつて岡氏本の文の「去年十一月」、「地震」の七字を欠いている。「史料」の 75 ページにはこの「正本」が引用され、宝永元年の頃に誤置されている。

## § 6. 四国の元禄津波史料

**土佐(高知港)** 高知県立図書館に「大変記」という文書のコピーが所蔵されている。原本は南国市の河村善行氏の所蔵である。この文書は大部分安政南海地震のことが記されているが、その中に次の様な一節がある。

又地震して汐曲ヒ等有時は油断すべからず。浪入来ルト知へし。其訳は土佐物語と号ある古人の控ニ記有ニも昔元禄十六癸未年十一月廿二日当国所々湊口汐満干日数三日不定、一日之間ニ四五度も曲ヒ不審する所に東国大地震、小田原崩レ安房上総江津浪入死人夥散、皆人の知ル所也。

東国から大地震の知らせが届く前に、土佐国で独自に海面異常に気付かれている。しかもその日付が廿三日ではなく廿二日となつていることに注目すべきである。南関東で二十三日の午前 2 時頃発生した津波は、3 時ごろ津波の初期が土佐に伝わっているはずであるが、土佐では人間活動の一番少い時間であるのにもかかわらずこれに気づかれていたことを示すものである。潮の異常に気づかれたのがあと二時間おそければ日付は二十三日となつていただであろう。土佐では潮の異常に気付かれたのみで被害は出ていないので、津波波高はせいぜい 1 m 前後であ

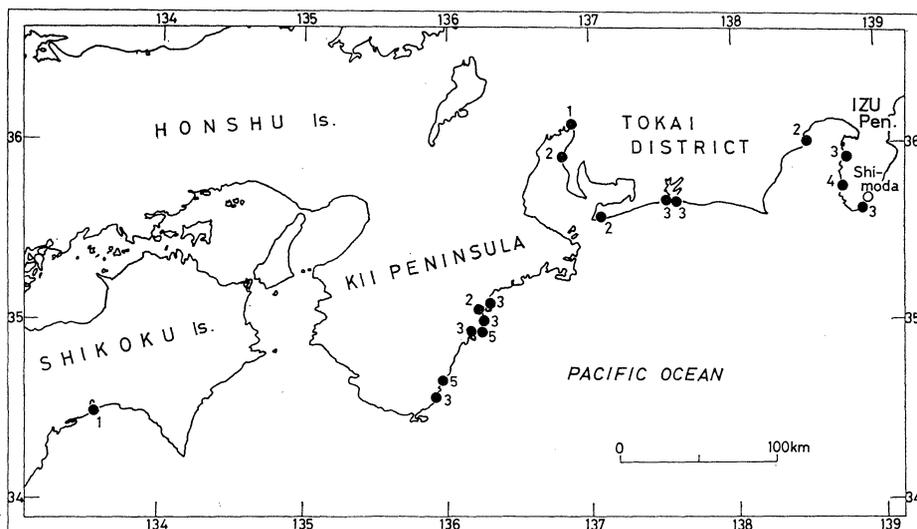


Fig. 3. Distribution of inundation height (m) of the Genroku tsunami estimated on the basis of old documents.

ろう。これに似た文が武者の「日本地震史料」の 323 ページに「三災録」中の引用文「聞出文盲」の一節として載せられているが、これまでの研究者には気づかれなかつたようである。

## §7. むすび

以上のように、元祿津波が遠州灘、伊勢湾はおろか、紀伊半島に流失家屋を出し、遠く土佐にまで及んでいたことが明らかとなつた。元祿地震はしばしば大正十二年の関東大地震と比較して論じられているが、伊豆半島以西の関東大地震による津波ははるかに小さく、串本で 18 cm, 高知市浦戸で 21 cm にすぎなかつた。元祿地震の震源が関東大地震のそれより南の海域にあつたことにもよるが、規模そのものも関東大地震よりはるかに大きかつたことが、このように遠い地方での津波の差となつて現われたのであろう。

「史料」の 64 ページには、「釜石小学校調査」という文献名で、「三陸地方余波をこうむり死傷あり」という、北の方の「孤立史料」がある。やはり研究者にはあまり重視されることのなかつたこの史料も、銚子以北の史料調査が進めば、関東から三陸にかけても空白を埋める史料群が発掘され、重要性を改めて認識されるようになる可能性が大きい。

最後に古文献取り扱いに対するコメントを一つ述べることにしたい。「細谷村記録」と「常光寺年代記」の二個の原文から「渥美郡史」が編されるとき、原史料には「漁船流失」とあつた文章が「漁網・漁具流失」にすり替えられてしまつた。さらにこの史料と知多半島の「大野

町史」だけを素材として、「愛知県災害誌」の編者は次のような記事を造文している。

津波により、渥美半島では死者が多く、船、網、漁具等が流失した。また知多半島でも人家の倒壊、流失が多数あり、尾張大野では内宮社の境内が崩壊した。

この最物の編者が本稿でとりあげたもの以外の史料をもつていなかったことは、同書に書かれた文献表のリストで明らかであるが、「渥美半島で死者多く」とか「知多半島で人家の倒壊、流失多数」とか、原史料にない事実を想像で作り出され、誇大表記されたことは明らかである。今後も愛知県各地で市町村誌が編さんされるであろうが、「災害誌」の上の記述がさらに孫引用され、雪だるま式に虚説が広がっていくことがないように切に願いたいものである。と同時に、歴史史料に基づいて研究をすすめるさい、確たる論拠も提示しないまま多くの想像を加えることは、研究者として最も避くべきことであることを確認することにしたい。

## 謝 辞

本研究を進めるに当り、貴重なご教示をいただいた豊橋市民文化会館の富安健次氏、常滑市民俗資料館の盛田美典氏、尾鷲市郷土館の伊藤良氏、海山町船越にお住いの脇貞憲氏に感謝いたします。

## 文 献

- チリ津波合同調査班, 1960, チリ地震津波踏査速報, 865 pp.  
 チリ津波合同調査班, 1961, 1960年5月24日チリ地震津波に関する論文及び報告, 397 pp.  
 羽鳥徳太郎・相田 勇・梶浦欣二郎, 1973, 南関東周辺における地震津波, 関東大地震 50周年論文集, 東京大学地震研究所, 57-66.  
 羽鳥徳太郎, 1975 a, 九十九里浜における元祿 16年(1703年)津波の供養碑, 地震 2, 82, 98-101.  
 羽鳥徳太郎, 1975 b, 房総沖における津波の波源, 地震研究所彙報, 50, 83-91.  
 羽鳥徳太郎, 1975 c, 元祿・大正関東地震津波の各地の石碑・言い伝え, 地震研究所彙報, 50, 385-395.  
 羽鳥徳太郎, 1976, 静岡県沿岸における元祿 16年(1703)津波の供養碑, 地震研究所彙報, 51, 63-81.  
 羽鳥徳太郎, 1977, 静岡県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査, 地震研究所彙報, 52, 407-439.  
 羽鳥徳太郎, 1978, 三重県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査, 地震研究所彙報, 53, 1191-1225.  
 羽鳥徳太郎, 1979, 九十九里浜における延宝(1677年)・元祿(1703年)津波の挙動, 地震研究所彙報, 54, 147-159.  
 岩手県教育会, 1933, 昭和8年震災資料, 19-66.  
 釜石尋常小学校郷土研究部, 1933, 三陸大海嘯記録, 4-12.  
 盛岡地方気象台, 岩手県, 1979, 岩手県災異年表, 69-75.  
 武者金吉, 1941, 増訂大日本地震史料, 第二巻, 文部省震災予防評議会, 35-75.  
 武者金吉, 1951, 日本地震史料, 毎日新聞社, 757 pp.  
 渋沢敬三, 1938, 豆州内浦漁民史料, 上巻, アチックミュージアム社, 564 pp.  
 都司嘉宣, 1979, 東海地方地震津波史料 (I・上巻), 防災科学研究資料, 35, 国立防災科学技術センター, 107-118.  
 脇貞 憲, 1977, ふるさとの民話と資料, 緑樹社, 83-84.